

第 7 研究

部門研究第 7 研究は、戦間期における身体・環境への生政治的介入の国際比較をテーマとして 3 年間の研究を行ってきた。本研究の目的は、国際秩序や地域社会が激動する戦間期に、「幸せ」を求める人びとの日常を、言説だけではなく、歴史的実態として、世界史的な視野から明らかにすることにある。そのために、身体および身体を取り巻く環境に関わる諸領域に焦点を当て、統治者による介入と、安心、安全、幸福を求めて行動する住民の活動を探る。その際、多様な国・地域を取り上げて、その特質を比較検討することによって、一国史的な歴史観で理解されてきたそれぞれの国・地域の歴史像を転換し、世界規模での共時性を折り込んだ、広義の「福祉」を通した住民への介入と、これに反発する住民という視点からの新たな世界史像を構築することをめざしてきた。

合同報告会では、この共同研究における一例として、ドイツにおけるホメオパシー健康協会の活動を取り上げた。ホメオパシーは、ハーネマンという大学で正規の医学教育を受けた医師によって 18 世紀末に考案された治療法であるが、ある特定の症状が出る疾病に対して、健康な人に服用させるとその疾病と類似の症状を引き起こすとされる物質を、天文学的に希釈して投与するという得意な治療法で、科学の常識と真っ向から対立し、正統医学の医師に批判され続けただけでなく、正統医学による衛生政策を推進しようとする公権力から監視され、抑圧の対象となった。

ホメオパシー健康協会は、この治療法を信奉する民間人によって、1880 年代から各地で結成され、ホメオパシーの治療法を習得の教育活動、治療薬頒布活動、ホメオパシー治療を有利にするためのロビー活動などを行うようになった。シュトゥットガルト市に隣接するヴァンゲンでも 1887 年にホメオパシー協会が結成された。この協会では石工であったラングという人物が、会員とその家族を治療するとともに、自己治療のために助言していた。しかし、彼は 1919 年に急死し、会員はラングの助言と治療を受けることができなくなった。こうした状況下で、個々の会員が治療についての能力を高めていく必要が生じた。こうして、協会の活動の中で、講演会の重要性が高まってきたのである。講演会は、すでに帝政期から年に 1 回程度は開催されていたが、第一次世界大戦後になると、年に数回開催されるようになった。とくに戦間期の講演では、循環器疾患、代謝疾患などの生活習慣病、性病やセクシュアリティにかかわる問題、栄養学など、20 世紀に発展した医学・科学

の新領域と関連するテーマが取り上げられた。そして、たいていの場合、講演者は、正規の医学教育を受けた医師であった。ホメオパシーは科学的医学と対立し、政府による抑圧を受けていたが、自分たちが望む治療法を維持するために、時に近代的な知を抵抗の手段として活用したのである。彼らは、教育を通して政府による介入を受け、近代的な知やシステムを受容していたが、この知を利用することによって、政府の医療・衛生政策に対抗しようとしたのである。